



小中学校の 学習指導に関する調査2020 ～コロナ禍の中の学校～



2020年1月以降、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行を受け、日本国内でも緊急事態宣言が発令され、ほとんどの公立学校が約2か月間にわたり、臨時休校を実施しました。

ベネッセ教育総合研究所では、臨時休校が明けた8月末から9月末にかけて、全国の公立小中学校の教員を対象に、コロナ禍での学校・教員の指導の実態と教員の意識を把握することを目的として、調査を行いました。

平時に加え、感染症対策などでご多忙の中、多くの教員の方々が本調査にご協力くださったことに心から感謝申し上げます。ここに報告する調査結果が、今後の教育実践の一助となりますようお願いしております。



目次

監修より本調査の意義・調査概要・・・p2
基本属性・・・p3

①休校期間中の学校の指導状況

- ①小学校の宿題・・・p4
- ②中学校の宿題・・・p5
- ③ICT機器の活用実態・・・p6
- ④再びの休校に備えての準備・・・p7

②学校再開後、1学期の授業実態と今後の意向

- ①1学期の授業実態・・・p8
- ②2学期以降の授業について・・・p9
- ③2学期以降、小学校での外国語授業の指導と評価・・・p10
- ④授業を進める上で目安とした子どもの成績レベル・・・p11
- ⑤小学校での遅れた学習に追い付くための工夫・・・p12
- ⑥中学校での遅れた学習に追い付くための工夫・・・p13

③学校再開後、1学期の家庭学習指導実態

- ①小学校の宿題の状況・・・p14
- ②中学校の宿題の状況・・・p15

④学校再開後、 1学期のICT機器の活用実態と今後

- ①小学校での活用実態と今後・・・p16
- ②中学校での活用実態と今後・・・p17

⑤教員のさまざまな意識

- ①教員が捉えた子どもの様子・・・p18
- ②教員の学力や指導に関する考え方・・・p19
- ③指導・学級経営について思うこと・・・p20
- ④仕事の量や教員間の連携について思うこと・・・p21
- ⑤教員の多忙感や疲れ・・・p22
- ⑥学校教育への意識変化・・・p23

監修より…本調査の意義

青山学院大学 コミュニティ人間科学部・学部特任教授 耳塚 寛明

緊急事態宣言が再度発出された今もなお、新型コロナウイルス感染症の勢いはとどまるところを知らない。そのこと自体は、社会運営上の、そして個人の人々の生活に対する脅威以外の何物でもない。その反面、パンデミックの拡大によって、気づかされたことや見えてきたものもある。新型コロナウイルス感染症の拡大は、それがなければ見えなかったものを見せてくれる、壮大な社会実験でもあった。

昨年春、教育界は全国的な休校期間を経験した。休校期間にいったい何が起こったのだろうか。休校期間やその後の学校運営上の変化は、子どもたちの生活や学びにどんな変化をもたらしたのだろうか。学校のたしかかな存在意義に気づかされる契機になったのだろうか、それとも学校などないほうがもっと効率的に学べると感じた人々のほうが多いのか。この調査の第一の意義は、はからずも訪れた休校期間(とその後)にいったい何が起こったのかを教えてくれるところにある。2020年8月末から速やかに実施されたこの調査以上に、それを教えてくれるデータを私は知らない。

学校は、家庭の経済的・文化的環境の凸凹をならす平等化装置である。一時的に学校が失せたことにより(休校期間)、家庭環境の影響がむき出しになったとしてもおかしくはない。学校による指導が乏しくなれば、家庭の経済的・文化的環境による学力格差は間違いなく大きくなってしまふ。どういう学校や教員が、休校期間中(とその後も)、きめ細かな指導を子どもたちに届けることに成功していたのか。今回の報告は第一報だが、今後、そうした問いに答える分析も必要になる。

この調査によって、パンデミックがなかったのであれば気付くことのできなかった学校の存在意義や、再度の休校に備えてなにを準備しておかねばならないのかについて、知見が共有されることを願っている。

調査概要

● 調査テーマ

コロナ禍での小学校・中学校における学習指導の実態と教員の意識

● 調査方法

郵送にて学校長に依頼し、教員がWEBにて回答する質問紙調査

● 調査対象

全国の公立小学校の教員1,218名、中学校の教員2,151名

	学校数			教員数		
	発送数	回収数	回収率	発送数	回収数	回収率
小学校	2,000	450	22.5%	12,000	1,218	10.2%
中学校	2,000	733	36.7%	12,000	2,151	17.9%

● 調査時期

2020年8月末～9月末

<抽出方法・条件>

学校抽出:全国の公立小・中学校のリストより、都道府県の教員数に応じた抽出確率で無作為に学校を抽出。

教員抽出:年齢、性別、担当学年、担当教科を考慮した各学校6名の教員の抽出を学校長に依頼した。小学校は学級担任をしている教員、中学校は国語・社会・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員を依頼対象としている。

● 調査項目

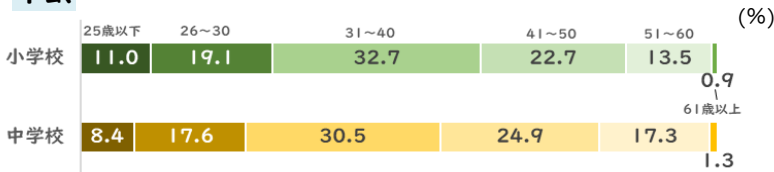
休校期間中の指導状況/学校再開後1学期の授業と今後の意向/1学期の宿題の実態/1学期のICT機器の指導での活用実態と今後の意向/教員が感じる児童・生徒の様子、学習指導などに関する意識/学校教育への意識の変化など

■本冊子を読む際の注意点

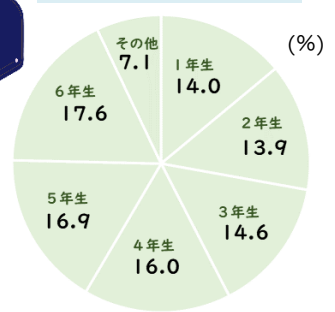
- ①小学校の「全体値」:学級担任していない「その他」と回答した人の回答も含まれている。
- ②中学校の「全体値」:「国語」「社会」「数学」「理科」「外国語」以外に、「その他」と回答した人の回答、学級担任を「していない」と回答した人の回答も含まれている。
- ③図表において、有効回収数すべてを集計対象としている場合は、人数を示していない。
- ④図表で使用している百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。
- ⑤各図表内の()内の値はサンプル数を表す。

基本属性

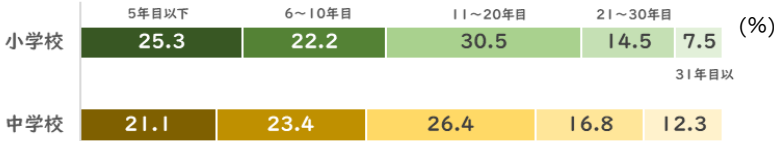
年齢



担当学年(小学校)



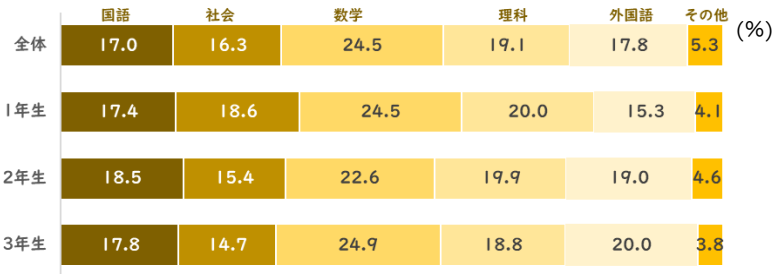
教職経験年数



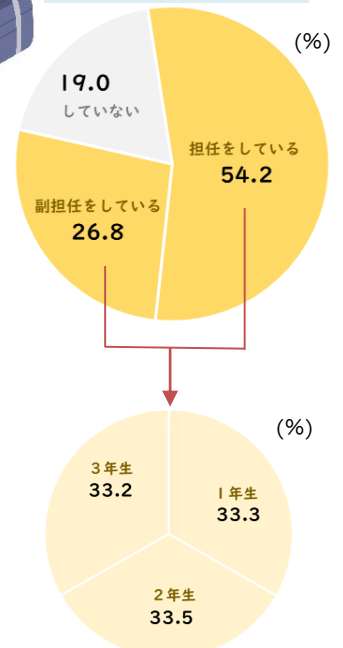
性別

	小学校全体	小学校学年別							中学校全体	中学校学年別		
		1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	その他		1年生	2年生	3年生
女性	52.0	80.0	66.9	53.4	46.7	38.8	38.3	41.9	32.9	35.0	37.2	33.3
男性	48.0	20.0	33.1	46.6	53.3	61.2	61.7	58.1	67.1	65.0	62.8	66.7

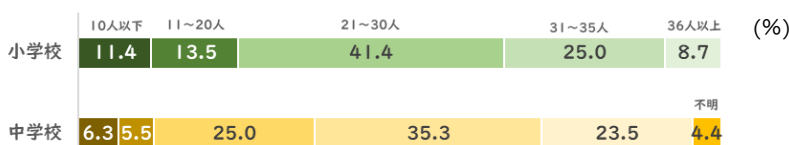
担当教科(中学校)



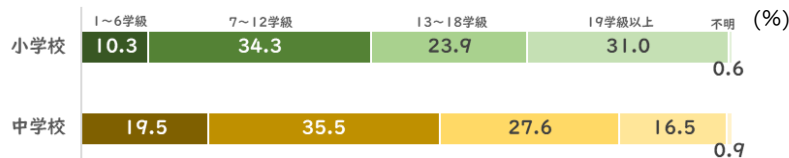
担当学年(中学校)



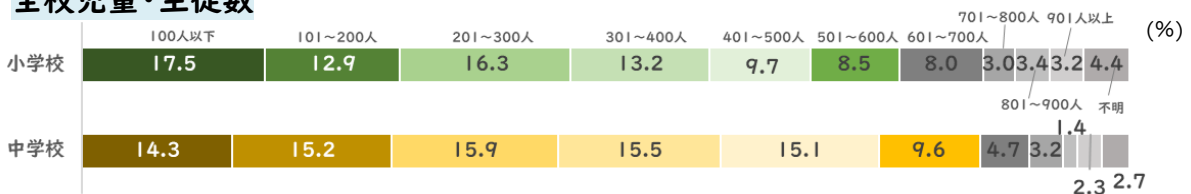
担当(副担当)している学級の児童・生徒数



全校学級数



全校児童・生徒数



※「学級担任をしているか」を尋ねた質問で、「していない」と回答した人を母数から除外している。

休校期間中の学校の指導状況

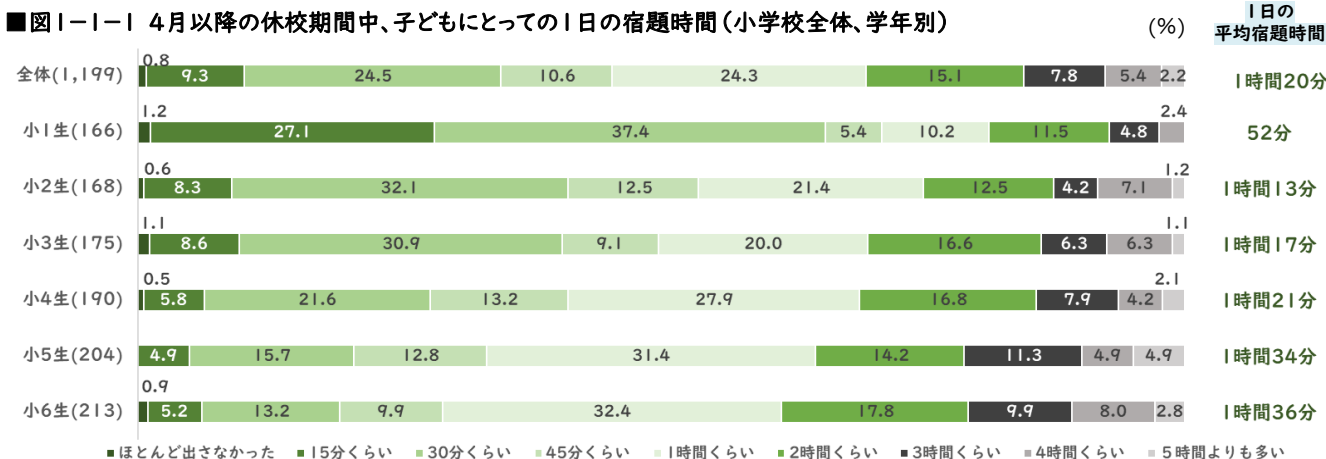
①小学校の宿題



休校期間中、1日の平均宿題時間は1時間20分。

小学校教員に休校期間中に出した宿題の量(時間)と内容について尋ねた。児童にとって1日の平均宿題時間は、全体では1時間20分である。学年別にみると1年生は52分で、学年が上がるにつれ長くなり、6年生では1時間36分である。宿題の内容をみると、低学年と高学年とも、前年度までの復習が6割弱、また習得型の課題が大半を占める。また、宿題の1割は読書や自由研究、お手伝いなど教科外の宿題である。

Q. 4月以降の休校期間中に、あなたが出した宿題や課題は、平均的な児童にとってほしい1日何分くらいの量でしたか。



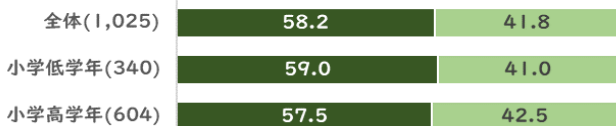
※「5時間よりも多い」は「5時間くらい」+「6時間くらい」+「6時間よりも多い」の合計。

※平均宿題時間は、「ほとんど出さなかった」を0分、「15分くらい」を15分、「6時間よりも多い」を420分のように置き換えて算出した。

Q. 4月以降の休校期間中に、あなたは、次のような宿題や課題をどれくらい出していましたか。

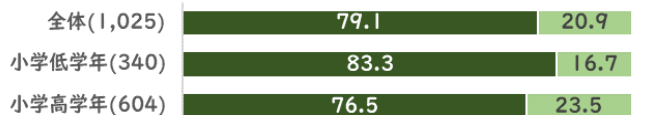
■ 1-1-2 4月以降の休校期間中に、出した宿題のタイプ(小学校全体)

【学習内容について】 (%)



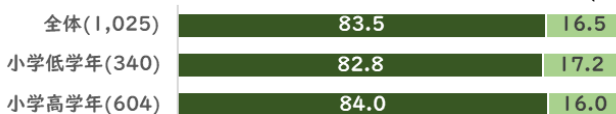
■ 前年度までの学習内容の復習
■ 今年度の内容の学習

【学び方について】 (%)



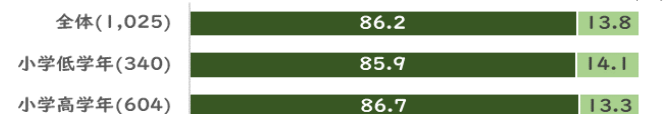
■ 習得型(漢字やドリルなど)の宿題や課題
■ 探究型(調べ学習など)の宿題や課題

【5教科と実技教科などについて】 (%)



■ 国語・算数・理科・社会・外国語に関する宿題や課題
■ 音楽、図画工作、家庭、体育、生活科などに関する宿題や課題

【教科と教科外について】 (%)



■ 教科に関する宿題や課題
■ 教科外(読書、自由研究、お手伝いなど)に関する宿題や課題

※4月以降の休校期間中、宿題を出したかと尋ねた質問で、「ほとんど出さなかった」と回答した人を除いて分析。

※「小学低学年」は小2生~小3生の学級担任をしている人の回答、「小学高学年」は小4生~小6生の学級担任をしている人の回答。

◎ 図1-1-1, 2 共通

※4月以降、休校したと回答した人のみ分析。

※「全体」に学級担任していない「その他」と回答した人の回答も含まれている。

休校期間中の学校の指導状況

②中学校の宿題

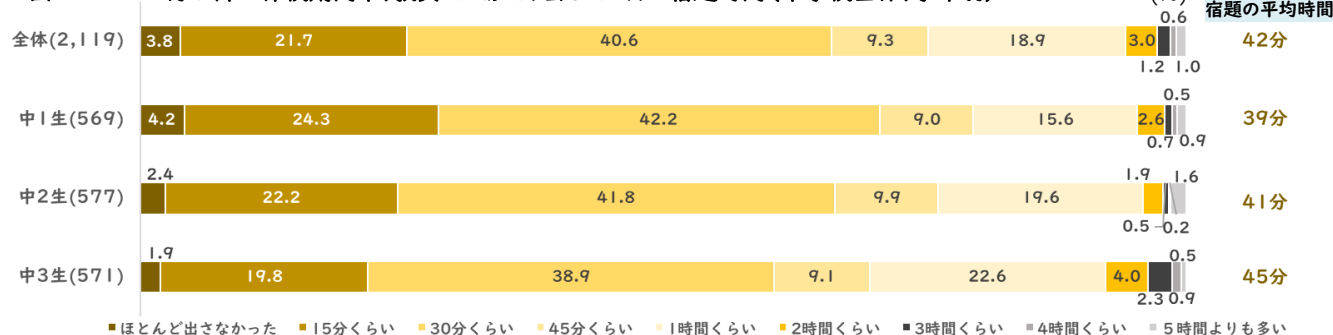


休校期間中、教員1人あたり、出した宿題は1日平均42分。

中学校教員に休校期間中に出した宿題の量(時間)と内容について尋ねた。教員1人あたり、出した宿題は生徒にとって1日平均42分である。学年別にみると1年生39分、2年生41分、3年生45分で、学年が上がるにつれ若干長くなっている。5教科別にみると、いずれも約40分前後で大きな差はない。宿題の内容をみると、前年度までの復習が多く、また習得型の課題が大半を占めている。その傾向は、5教科いずれも同様であるが、とくに数学と外国語で顕著である。

Q. 4月以降の休校期間中に、あなたが出した宿題や課題は、平均的な生徒にとってほしい1日何分くらいの量でしたか

■ 図1-2-1 4月以降の休校期間中、教員1人あたり出した1日の宿題時間(中学校全体、学年別)



教員1人あたり出した1日の宿題の平均時間

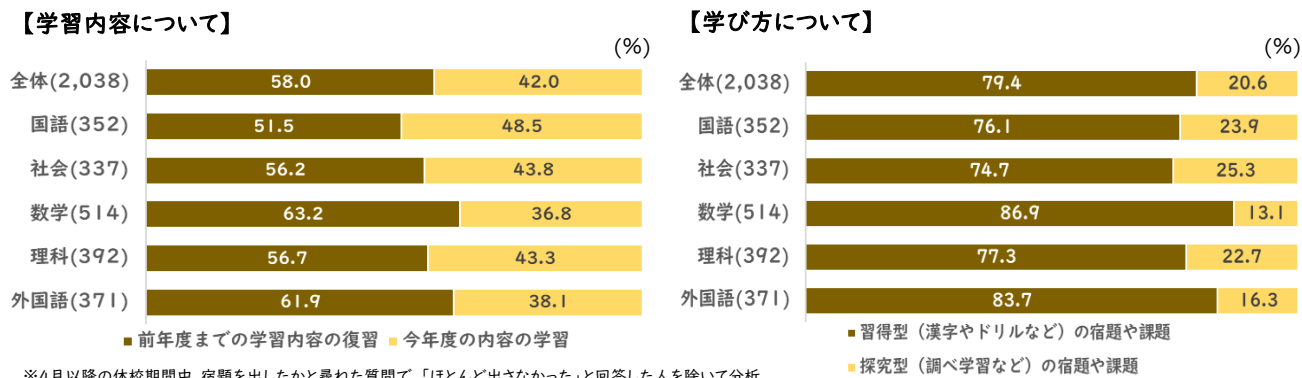
教員1人あたり出した1日の宿題の平均時間(教科別)

国語	社会	数学	理科	外国語
42分	44分	44分	37分	44分

※「5時間よりも多い」は「5時間くらい」+「6時間くらい」+「6時間よりも多い」の合計。
 ※宿題の平均時間は、「ほとんど出さなかった」を0分、「15分くらい」を15分、「6時間よりも多い」を420分のように置き換えて算出した。
 ※中学校では教科担任制であるため、教員1人あたり、出した1日の宿題時間は、単純に小学校の1日の平均宿題時間(p4)と比較することはできない。

Q. 4月以降の休校期間中に、あなたは、次のような宿題や課題をどれくらい出していましたか。

■ 図1-2-2 4月以降の休校期間中に、出した宿題のタイプ(中学校全体、教科別)



※4月以降の休校期間中、宿題を出したかと尋ねた質問で、「ほとんど出さなかった」と回答した人を除いて分析。

◎ 図1-2-1、2共通

※4月以降、休校したと回答した人のみ分析。

※「全体」に「国語」「社会」「数学」「理科」「外国語」以外に、「その他」と回答した人の回答、学級担任を「していない」と回答した人の回答も含まれている。

休校期間中の学校の指導状況

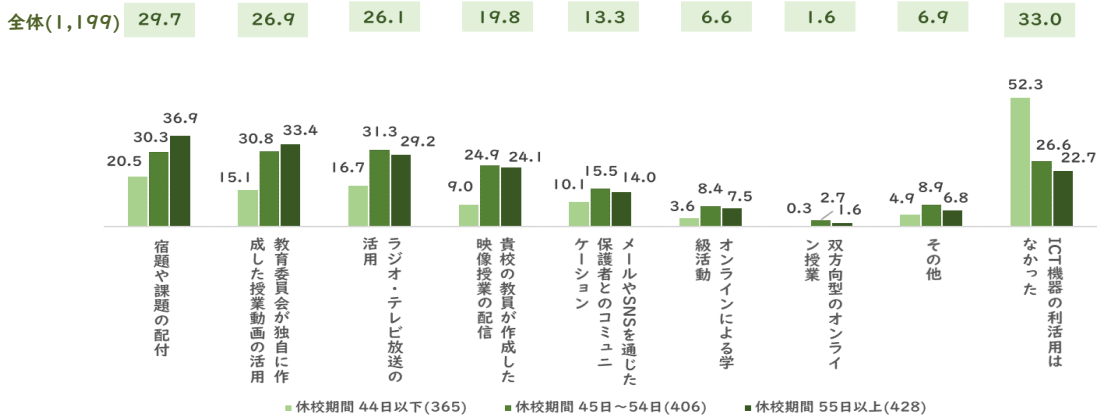
③ICT機器の活用実態

休校期間中、双方向型のオンライン授業を行った教員はごくわずかだった。

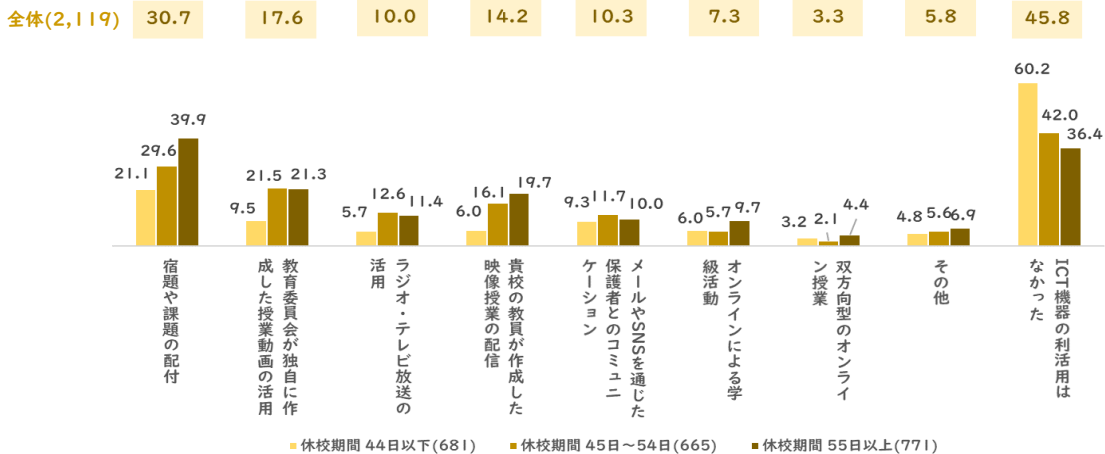
休校期間中のICT機器の利活用について尋ねた。ICT機器の利活用はなかったとの回答は、小学校教員全体33.0%、中学校教員全体45.8%で、中学校教員のほうが活用が少ない。休校期間別にみると、期間が短い学校の教員ほど活用が少ない傾向である。双方向型のオンライン授業を行ったとの回答は、小学校全体教員1.6%、中学校教員全体3.3%にとどまり、休校期間別での差もみられなかった。

Q. 4月以降の休校期間中に、あなたが学習指導や児童/生徒指導において、ICT機器などを使って、次のようなことを行いましたか。あてはまるものをすべて選んでください。

■ 図1-3-1 4月以降の休校期間中に、ICT機器の指導での活用実態（小学校全体、休校期間別） (%)



■ 図1-3-2 4月以降の休校期間中に、ICT機器の指導での活用実態（中学校全体、休校期間別） (%)



◎ 図1-3-1、2共通

※4月以降、休校したと回答した人のみ分析。
 ※小学校では、「全体」に学級担任していない「その他」と回答した人の回答も含まれている。
 ※中学校では、「全体」に「国語」「社会」「数学」「理科」「外国語」以外に、「その他」と回答した人の回答、学級担任を「していない」と回答した人の回答も含まれている。
 ※休校期間は、4月以降の休校開始日と終了日から休校日数を算出し、3分割にした。
 ※中学校の4月以降の休校期間の開始日と終了日の記入に論理エラーがあった2ケースは中学校の全体値に含まれているが、休校期間別の数値には含まれていない。
 ※複数回答。

休校期間中の学校の指導状況

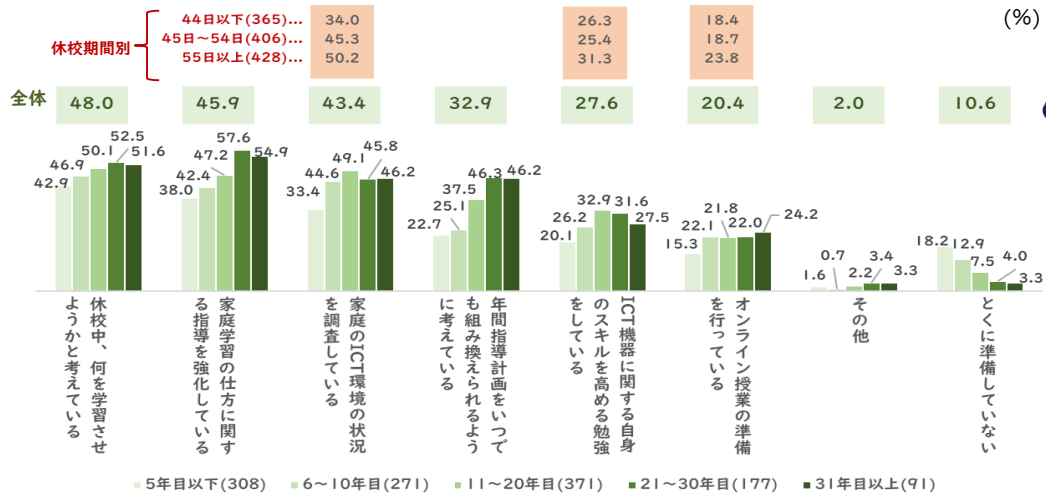
④ 再びの休校に備えての準備

オンライン授業を準備している教員は2割前後。

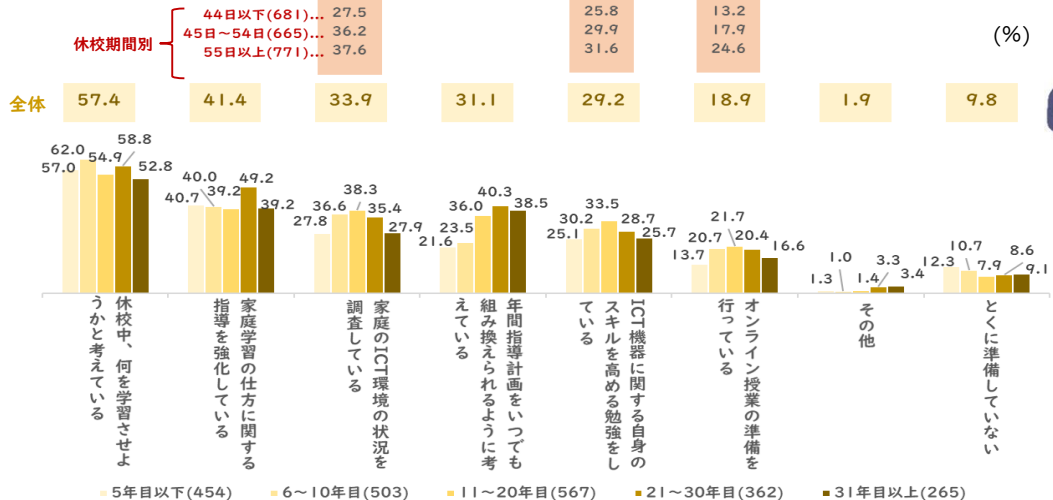
再びの休校に備えての準備について尋ねた。とくに準備していないとの回答は、小学校教員全体10.6%、中学校教員全体9.8%である。教職経験年数別にみると、小学校では年数が長い教員ほどさまざまな準備をしている。一方、中学校では年数が短い教員ほど休校中の学習内容を、年数が長い教員ほど年間指導計画の組み換えを考えている傾向である。オンライン授業の準備を行っている教員は小・中学校ともに2割前後である。また休校期間が長い学校の教員ほど選択した割合が高い。

Q.この先に(再び)学校が休校になった場合に備えて、あなたは学習指導に関して次のような準備をしていますか。あてはまるものをすべて選んでください。

■ 図1-4-1 再びの休校に備えての準備状況(小学校全体、教職経験年数別、休校期間別)



■ 図1-4-2 再びの休校に備えての準備状況(中学校全体、教職経験年数別、休校期間別)



◎ 図1-4-1、2共通

※再び学校が休校になった場合に備えての準備状況を尋ねた質問は、休校したかに関係なく回答者全員を分析。 ※複数回答。
 ※休校期間別の数値については、4月以降休校したと回答した人のみを分析。 ※休校期間は4月以降の休校開始日と終了日から休校日数を算出し、3分割にした。
 ※中学校の4月以降の休校期間の開始日と終了日の記入に論理エラーがあった2ケースは中学校の全体値に含まれているが、休校期間別の数値には含まれていない。
 ※休校期間別は、最高値と最小値との間に5ポイント以上差がある項目のみ図示。

2 学校再開後、1学期の授業実態と今後の意向

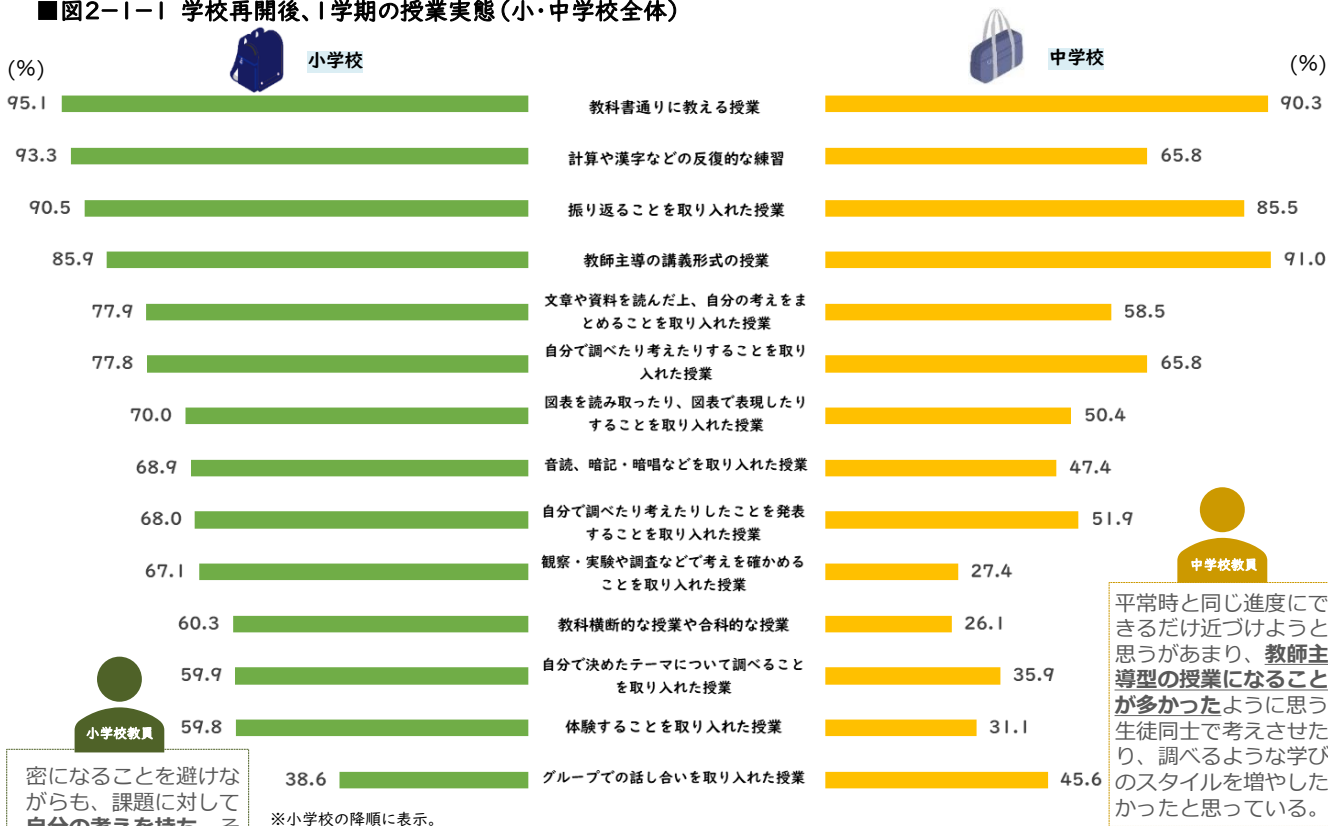
① 1学期の授業実態

1学期(学校再開後)では、
「教科書通りに教える授業」が多かった。

1学期(学校再開後)の授業について尋ねた。小・中学校ともに、教科書通りに教える・振り返ることを取り入れた・教師主導の講義形式の授業を「よく+ときどき行った」と、8~9割の教員が回答している。一方で、グループでの話し合いを取り入れた授業は小学校教員で約4割、教科横断的な授業、観察・実験や調査、体験を取り入れた授業は中学校教員で約3割にとどまる。休校明けの1学期では、アクティブ・ラーニング型の授業は比較的少なかった。休校期間別の結果をみると、新型コロナウイルスの影響を受けている様子がうかがえる。

Q.あなたは1学期(休校した学校は休校期間を除く)の教科の授業において、次のような授業をどれくらい行いましたか。

■ 図2-1-1 学校再開後、1学期の授業実態(小・中学校全体)



■ 表2-1-1 学校再開後、1学期の授業実態(休校期間別)

	小学校			中学校		
	44日以下 (365)	45日~54日 (406)	55日以上 (428)	44日以下 (681)	45日~54日 (665)	55日以上 (771)
教師主導の講義形式の授業	81.7	88.7	87.6	89.1	92.1	91.7
音読、暗記・暗唱などを取り入れた授業	72.1	70.0	65.2	49.2	45.6	47.2
自分で調べたり考えたりしたことを発表することを取り入れた授業	72.9	69.9	61.7	55.5	47.8	51.6
体験することを取り入れた授業	66.0	56.2	57.3	33.8	27.6	30.8
グループでの話し合いを取り入れた授業	48.2	36.7	31.1	52.8	41.6	41.9

※4月以降、休校したと回答した人のみ分析。
※休校期間は4月以降の休校開始日と終了日から休校日数を算出し、3分割にした。
※最高値と最小値との間に5ポイント以上差がある項目のみ図示。

◎ 図2-1-1、表2-1-1共通

※ 「よく行った」+「ときどき行った」の%。

2 学校再開後、1学期の授業実態と今後の意向

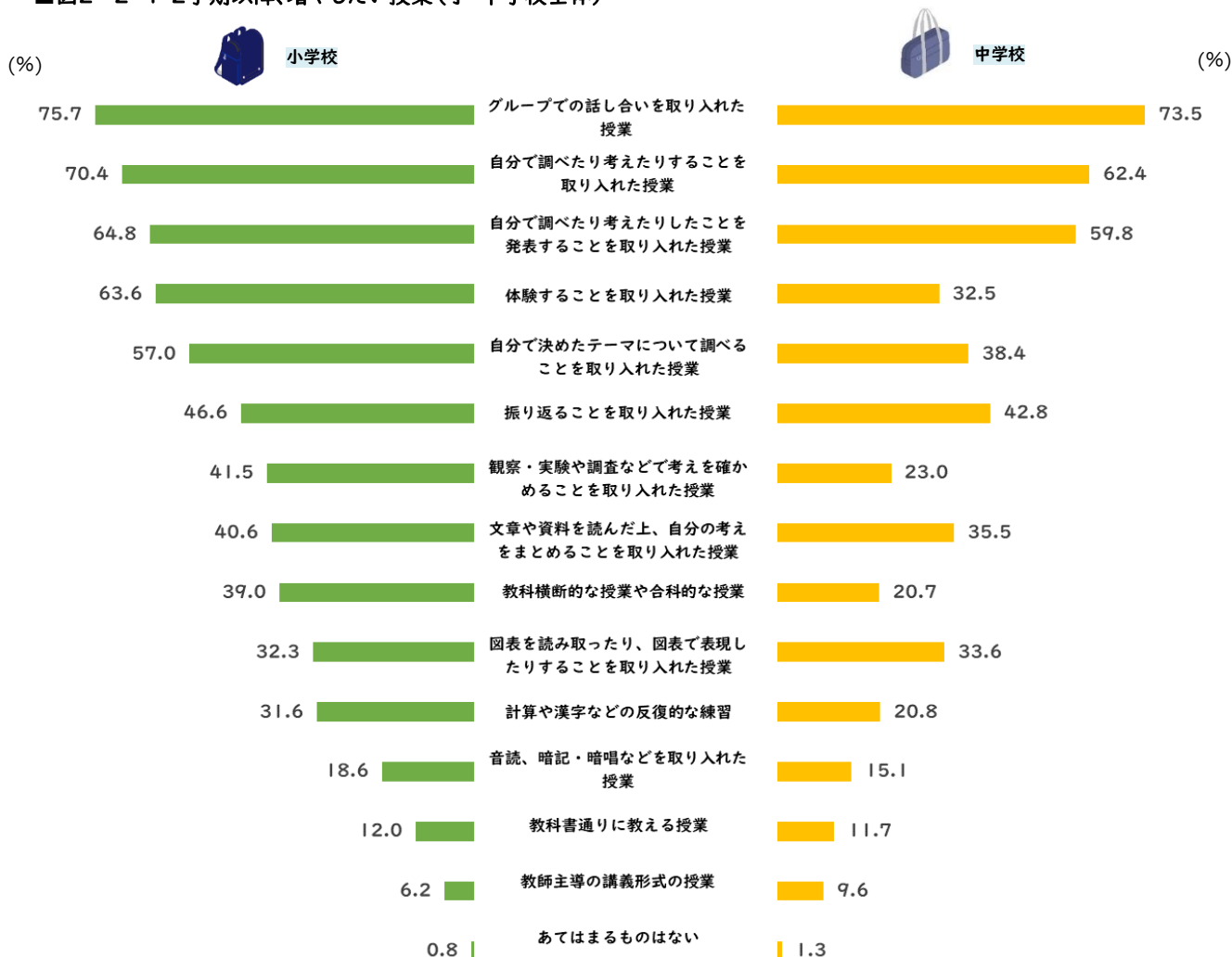
②2学期以降の授業について

2学期以降は、アクティブ・ラーニング型の授業を増やしたい意向。

2学期以降に増やしたい授業について尋ねた。小・中学校の教員ともに、グループでの話し合いを取り入れた授業、自分で調べたり考えたりしたことを取り入れた授業や発表する授業が上位にあがっている。一方で、教科書通りに教える授業や、教師主導の講義形式の授業は下位にとどまる。1学期の授業実態(P8)と照合すると、1学期にできなかった授業を今後取り入れていきたい意向が読み取れる。

Q. 2学期以降、次のような授業のうち、増やしたいものはありますか。あてはまるものをすべて選んでください。

■ 図2-2-1 2学期以降、増やしたい授業(小・中学校全体)



※複数回答。
※小学校の降順に表示。

2 学校再開後、1学期の授業実態と今後の意向



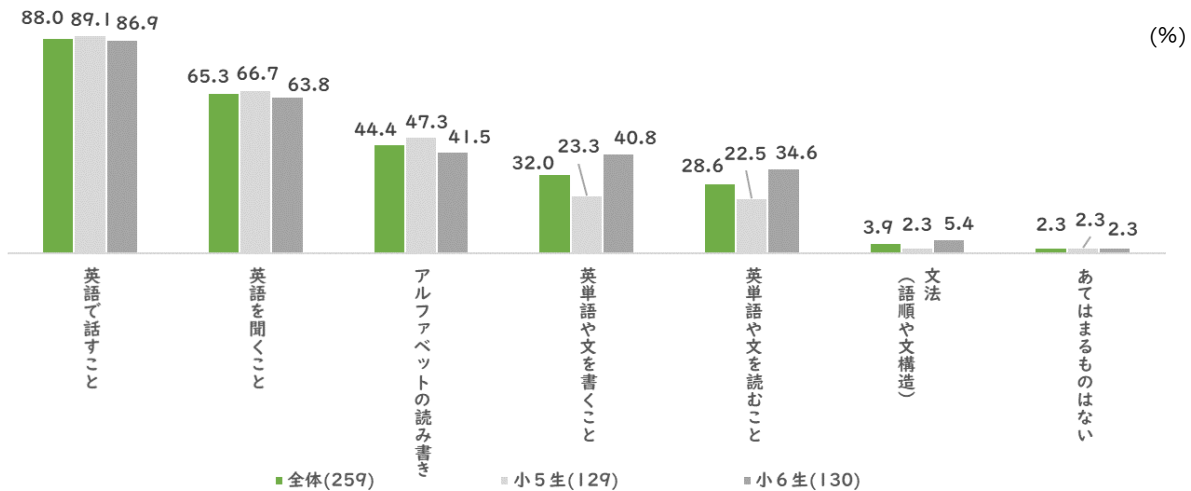
③2学期以降、小学校での外国語授業の指導と評価

2学期以降の小学校英語では、 話す・聞くことを重点的に指導したい考え。

2学期以降、小学校での外国語授業の指導と評価について尋ねた。全体をみると、重点的にやろうとしていると回答した割合は、英語で話すこと88.0%、聞くこと65.3%で、英単語や文を書くこと32.0%、読むこと28.6%より多い。一方で担当学年別にみると、英単語や文を書くこと・読むことを重点的にやろうとしている割合は小5生より小6生の担当教員で増えており、中学校進学に向けて読み書きにも力を入れ始める様子がうかがえる。

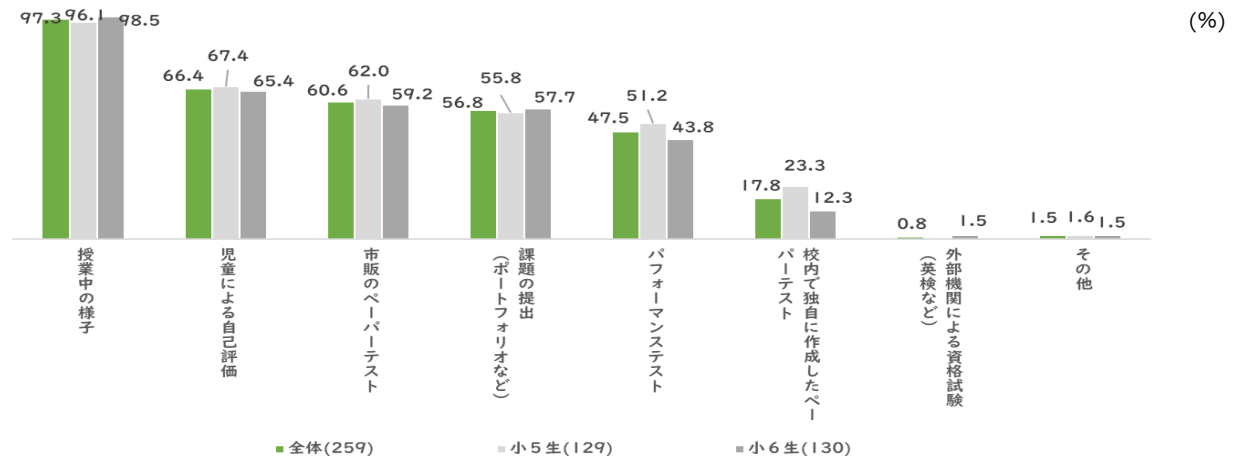
Q. 「外国語」の授業を担当している方におうかがいします。2学期以降、特に重点的にやろうと意識していることはありますか。あてはまるものをすべて選んでください。

■ 図2-3-1 2学期以降、外国語授業で特に重点的にやろうと意識していること(小学校全体、小5生と小6生)



Q. 2学期以降の「外国語」の評価についておうかがいします。評価の材料には何を使いますか。あてはまるものをすべて選んでください。

■ 図2-3-2 2学期以降、外国語の評価の材料(小学校全体、小5生と小6生)



◎ 図2-3-1、2共通

※小5生と小6生の外国語授業を担当していると回答した人のみ分析。

※複数回答。 ※小学校の降順に表示。

2 学校再開後、1学期の授業実態と今後の意向

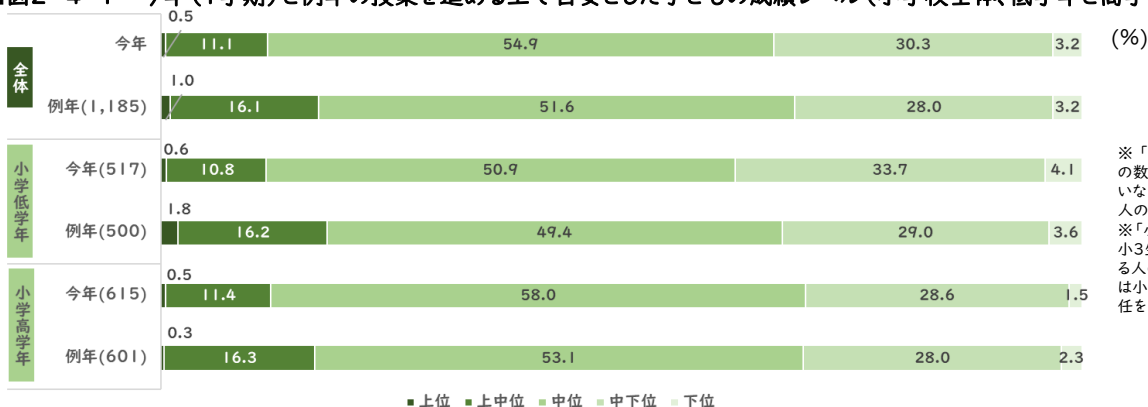
④授業を進める上で目安とした子どもの成績レベル

1学期(学校再開後)の授業は、 例年より成績低めのレベルを目安に進めた。

今年(2020年度)の1学期と例年の、授業で目安とする子どもの成績レベルについて尋ねた。小・中学校の教員ともに、例年より上中位が減少、中位・中下位が増加しており、1学期(学校再開後)は例年より成績が低めのレベルを目安に授業を進めたことがわかる。小学校の低・高学年別や中学校の教科別にみても、いずれも同様の傾向である。また中学校教員では下の学年ほど、例年よりも中下位・下位を目安に授業を進めた傾向が強い。

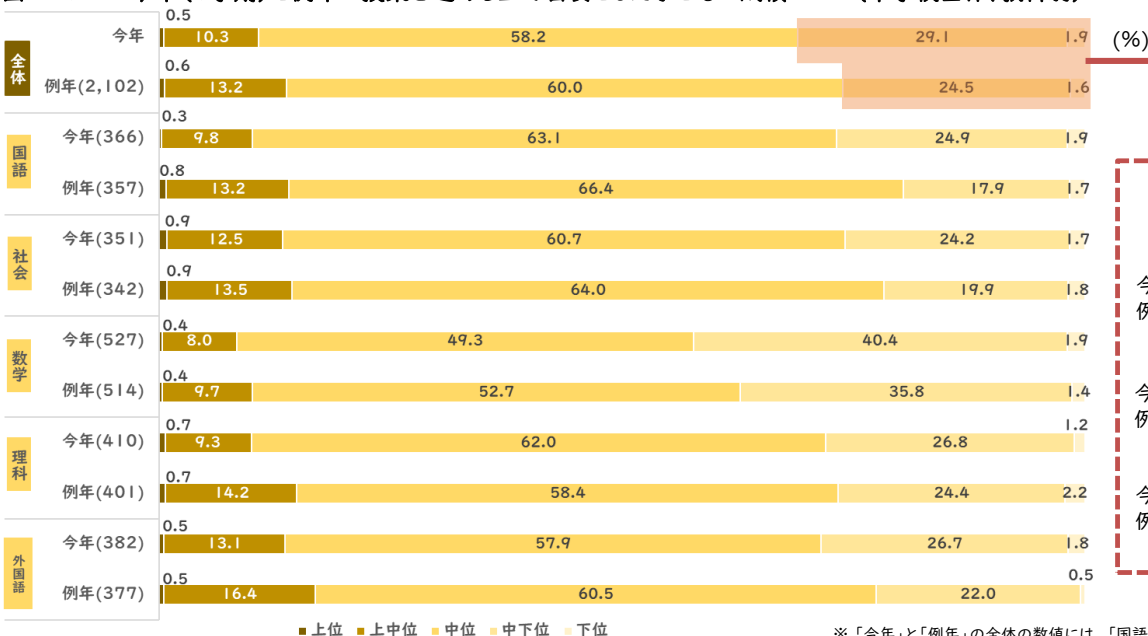
Q.あなたは、1学期の授業で/例年、どの程度の成績レベルの児童/生徒を目安にして授業を進めていましたか。もっとも近いものを1つ選んでください

■ 図2-4-1 今年(1学期)と例年の授業を進める上で目安とした子どもの成績レベル(小学校全体、低学年と高学年別)



※「今年」と「例年」の全体の数値には、学級担任していない「その他」と回答した人の回答も含まれている。
※「小学低学年」は小1生～小3生の学級担任をしている人の回答、「小学高学年」は小4生～小6生の学級担任をしている人の回答。

■ 図2-4-2 今年(1学期)と例年の授業を進める上で目安とした子どもの成績レベル(中学校全体、教科別)



※「今年」と「例年」の全体の数値には、「国語」「社会」「数学」「理科」「外国語」以外に、「その他」と回答した人の回答、学級担任を「していない」と回答した人の回答も含まれている。

◎ 図2-4-1、2共通

※「例年」の数値は、「わからない」と回答した人を除いて分析。

2 学校再開後、1学期の授業実態と今後の意向



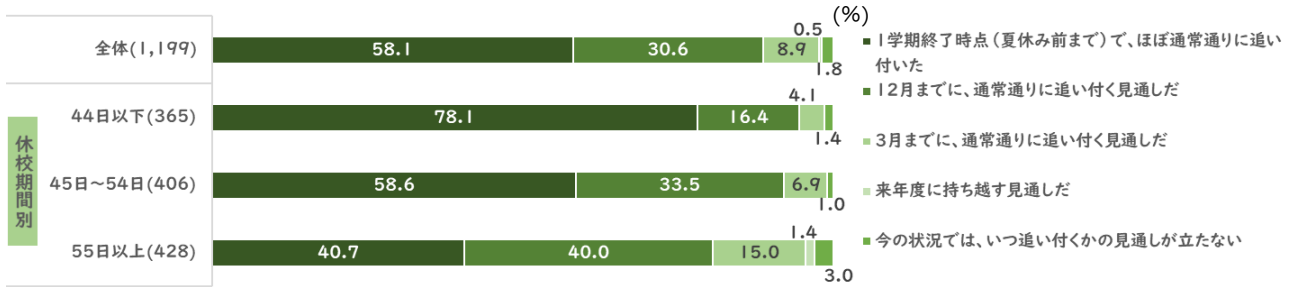
⑤ 小学校での遅れた学習に追いつくための工夫

授業を通常に追いつかせるための工夫は、 内容の精選とスピードアップ。

休校により遅れた学習について、通常に追いつく時期やそのための工夫を尋ねた。全体で、1学期終了時点で追いついたから3月までに追いつくと回答した小学校教員は9割以上である。休校期間別にみると顕著な差があり、期間が長い学校ほど追いつくまで時間がかかる傾向である。遅れた学習を取り戻す工夫として、内容の精選とスピードを上げての授業が上位にあがる。一方で、スピードを上げて授業を進めた教員ほど、児童が授業を理解していないと感じていることも明らかとなった。

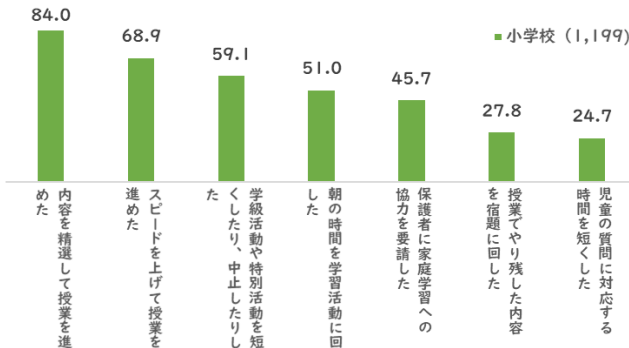
Q. 休校による学習の遅れへの対応や授業進捗の現状についておうかがいします。授業進捗は、通常通りに追いつきましたか。もっとも近いものを1つ選んでください。

■ 図2-5-1 小学校での遅れた学習を通常通りに追いつく時期（小学校全体、休校期間別）

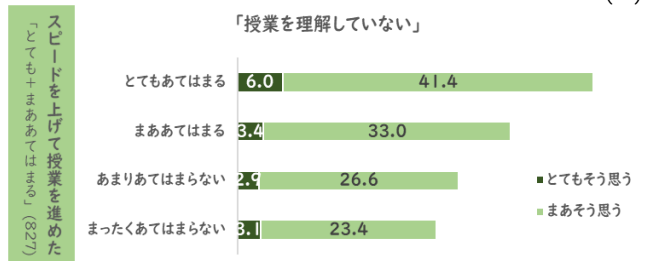


Q. 休校による学習の遅れや授業進捗を取り戻すために、あなたが行った工夫、学校として取り組んだ工夫についておうかがいします。

■ 図2-5-2 遅れた学習を取り戻すために、教員自身が行ったこと（小学校全体）



■ 図2-5-3 教員が感じる「スピードを上げて授業を進めた」と子どもの授業理解度との関連（%）



■ 図2-5-4 遅れた学習を取り戻すために、学校として取り組んだこと（小学校全体、休校期間別）

行事の精選や中止	全体 (1,199)	休校期間別 (%)		
		44日以下 (365)	45日~54日 (406)	55日以上 (428)
行事の精選や中止	85.6	80.5	85.5	90.0
長期休業期間の短縮	80.2	76.2	80.0	83.6
15分程度のモジュール方式の実施	25.5	16.2	28.8	30.4
1日のコマ数（授業時数）の増加	21.2	14.2	21.4	26.9
土曜授業の実施	18.1	11.0	11.1	30.8
放課後の補習	6.0	6.0	4.2	7.7
その他	2.3	1.4	3.2	2.3

昨年度土曜授業はなかったが、今年度は実施している
30.0 (%)

昨年度土曜授業があったが、今年度は回数が増えた
46.5 (%)

◎ 図2-5-1~4共通

※4月以降、休校したと回答した人のみ分析。
※「全体」に学級担任していない「その他」と回答した人の回答も含まれている。
※休校期間は、4月以降の休校開始日と終了日から休校日数を算出し、3分割にした。

※「土曜授業の実施」と回答した人(217人)を分析。

※複数回答。

2 学校再開後、1学期の授業実態と今後の意向

⑥ 中学校での遅れた学習に追いつくための工夫

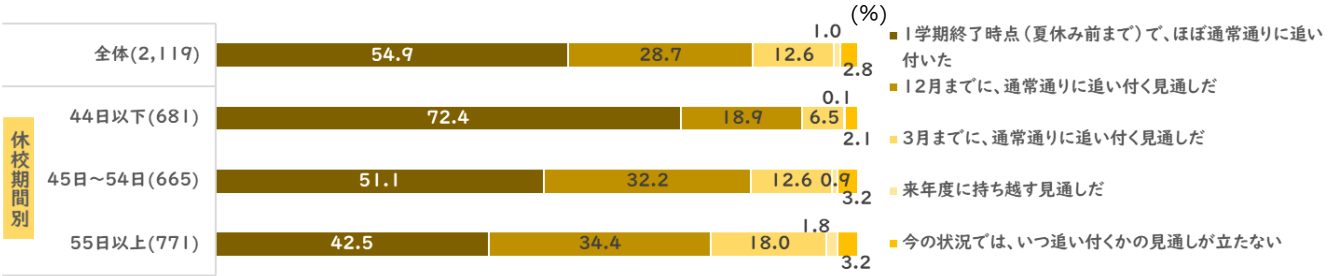


授業スピードを上げるほど、生徒の理解度が落ちる傾向。

休校により遅れた学習について、通常に追いつく時期やそのための工夫を尋ねたところ、1学期終了時点で追いついたから3月までに追いつくと回答した中学校教員は9割以上である。休校期間が55日以上(665)の学校では、2割弱の教員は3月までに追いつくと回答した。遅れた学習を取り戻す工夫は、内容の精選とスピード上げての授業が上位にあがる。一方、スピードを上げて授業を進めた教員ほど、生徒が授業を理解していないと感じる点も小学校教員と同様である。

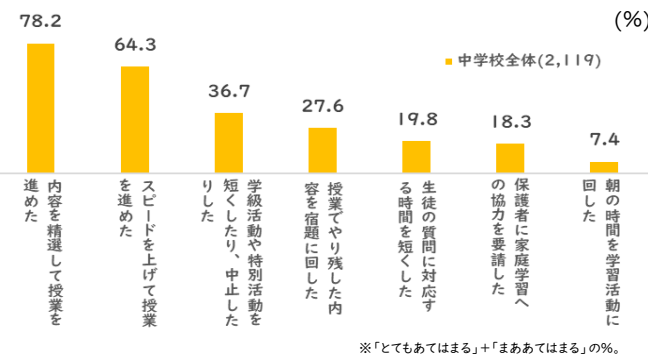
Q.休校による学習の遅れへの対応や授業進捗の現状についておうかがいします。授業進捗は、通常通りに追いつきましたか。もっとも近いものを1つ選んでください。

■図2-6-1 中学校での遅れた学習を通常通りに追いつく時期(中学校全体、休校期間別)

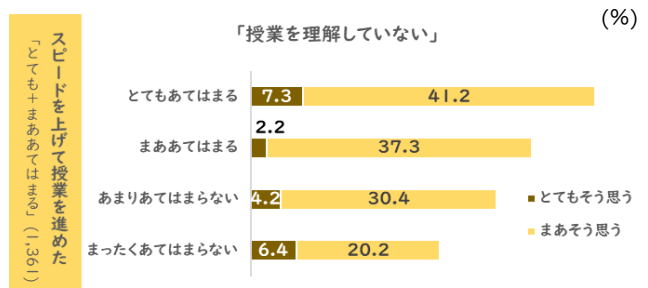


Q.休校による学習の遅れや授業進捗を取り戻すために、あなたが行った工夫、学校として取り組んだ工夫についておうかがいします。

■図2-6-2 遅れた学習を取り戻すために、教員自身が行ったこと(中学校全体)



■図2-6-3 教員が感じる「スピードを上げて授業を進めた」と子どもの授業理解度との関連



■図2-6-4 遅れた学習を取り戻すために、学校として取り組んだこと(中学校全体、休校期間別)

	全体(2,119)	休校期間別 (%)		
		44日以下(681)	45日~54日(665)	55日以上(771)
長期休業期間の短縮	83.0	80.0	85.0	83.9
行事の精選や中止	82.9	78.3	85.4	85.0
1日のコマ数(授業時数)の増加	30.6	24.1	32.8	34.6
土曜授業の実施	18.3	13.8	15.5	24.8
放課後の補習	7.3	7.8	9.0	5.4
15分程度のモジュール方式の実施	5.4	3.2	6.3	6.6
その他	3.0	3.8	2.6	2.7

昨年度土曜授業はなかったが、今年度は実施している (%)

25.0

昨年度土曜授業があったが、今年度は回数が増えた (%)

51.5

◎図2-6-1~4共通

※4月以降、休校したと回答した人のみ分析。
 ※「全体」に「国語」「社会」「数学」「理科」「外国語」以外に、「その他」と回答した人の回答、学級担任を「していない」と回答した人の回答も含まれている。
 ※休校期間は、4月以降休校が開始した日と終了した日から期間を算出し、3分割にした。
 ※4月以降の休校期間の開始日と終了日の記入に論理エラーがあった2ケースは全体値に含まれているが、休校期間別の数値には含まれていない。

※「土曜授業の実施」と回答した人(388人)を分析。

※複数回答。

3 学校再開後、1学期の家庭学習指導実態



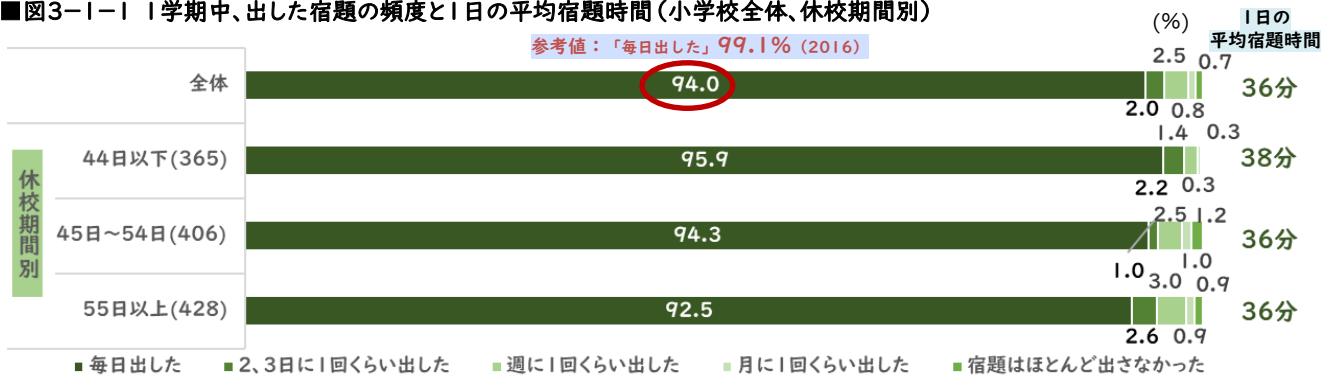
①小学校の宿題の状況

休校期間が長い学校の教員ほど、
1学期(学校再開後)に出した宿題は少ない傾向。

1学期(学校再開後)の宿題の状況について尋ねた。同様の設問を尋ねた「第6回学習指導基本調査」(2016年、当研究所実施、参考値)と比較すると、宿題を出す頻度や宿題時間が微減しており、全体的に通常時より出した宿題が少ない傾向がうかがえる。宿題の種類をみると、漢字や計算、音読が多い。また、休校期間が長い学校の教員ほど出した宿題のうち、授業の予習、復習、作文やレポートに関するものは少なかった。

Q.あなたは1学期中(休校した学校は休校期間を除く)に、どれくらい宿題を出していましたか。また平均的な児童にとってほしい1日何分くらいの量でしたか。

■図3-1-1 1学期中、出した宿題の頻度と1日の平均宿題時間(小学校全体、休校期間別)

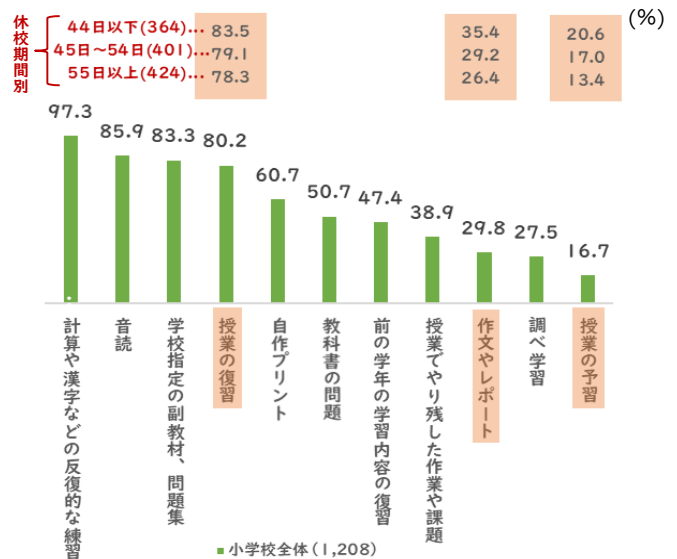


■表3-1-1 1学期中、1日出した宿題の平均時間(全体と学年別の経年比較)

	本調査 (1,208)	2016年 (3,160)	本調査-2016年 の差
全体	36分	39分	-3分
1年生	25分	27分	-2分
2年生	30分	32分	-2分
3年生	34分	38分	-4分
4年生	39分	42分	-3分
5年生	41分	48分	-7分
6年生	45分	48分	-3分

Q.あなたは1学期中(休校した学校は休校期間を除く)にどのような内容の宿題を出しましたか。

■図3-1-2 1学期中、出した宿題の種類(小学校全体、休校期間別)



◎図3-1-1、表3-1-1共通

※2016年の数値は、ベネッセ教育総合研究所で2016年に実施した「第6回学習指導基本調査」のもので、無回答不明を母数から除外して算出した(3,160人)。また1学期の宿題に絞っていない聞き方をしているため、参考値とした。
※宿題の平均時間については、「15分くらい」を15分、「1時間くらい」を60分、「それ以上」を75分のように、置き換えて算出した。
※「宿題はほとんど出さなかった」と回答した人を除いて分析。

◎図3-1-1、2共通

※休校期間別の数値については、4月以降休校したと回答した人のみを分析。
※休校期間は4月以降の休校開始日と終了日から休校日数を算出し、3分割にした。
※「宿題はほとんど出さなかった」と回答した人を除いて分析。

※「よく出した」+「たまたま出した」の%。

3 学校再開後、1学期の家庭学習指導実態

②中学校の宿題の状況



1学期(学校再開後)は、
通常時より出した宿題が少ない傾向。

1学期(学校再開後)の宿題の状況について尋ねた。同様の設問を尋ねた「第6回学習指導基本調査」(2016年、当研究所実施、参考値)と比較すると、出した宿題の量(時間)が微減したが、出す頻度はかなり減少しており、通常時より宿題が少ない傾向がうかがえる。また、休校期間が長い学校の教員ほど、出した宿題のうち、計算や漢字などの反復的な練習や前の学年の復習、定期試験対策や高校入試対策に関するものは少なかった。

Q.あなたは1学期中(休校した学校は休校期間を除く)に、どれくらい宿題を出していましたか。
また平均的な生徒にとってほしい1日何分くらいの量でしたか。

■図3-2-1 1学期中、出した宿題の頻度と1回あたりの平均宿題時間(中学校全体、休校期間別)

参考値:「授業のたびに出した」29.6% 「授業2, 3回に1回くらい出した」30.0%(2016)

	1回あたりの平均宿題時間 (%)					1回あたりの平均宿題時間
	授業のたびに出した	授業2, 3回に1回くらい出した	授業4, 5回に1回くらい出した	月に1回くらい出した	宿題はほとんど出さなかった	
全体	18.1	26.1	21.4	14.0	20.4	31分
休校期間別						
44日以下(681)	22.0	27.5	22.3	11.3	16.9	31分
45日~54(665)	16.8	28.3	21.4	13.4	20.2	31分
55日以上(771)	16.0	22.7	21.0	16.9	23.5	32分

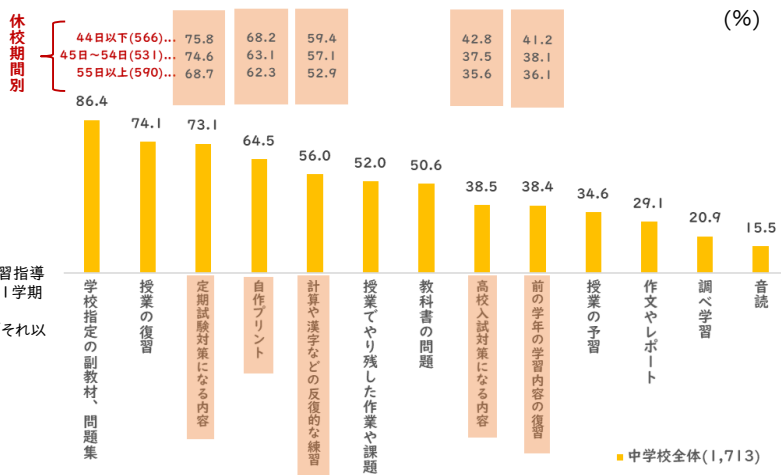
■ 授業のたびに出した ■ 授業2, 3回に1回くらい出した ■ 授業4, 5回に1回くらい出した ■ 月に1回くらい出した ■ 宿題はほとんど出さなかった

■表3-2-1 1学期中、1回あたりの平均宿題時間(全体と教科別の経年比較)

	本調査 (1,713)	2016年 (3,648)	本調査-2016年 の差
全体	31分	34分	-3分
国語	31分	34分	-3分
社会	36分	35分	1分
数学	29分	32分	-3分
理科	36分	38分	-2分
外国語	28分	32分	-4分

Q.あなたは1学期中(休校した学校は休校期間を除く)にどのような内容の宿題を出しましたか。

■図3-2-2 1学期中、出した宿題の種類(中学校全体、休校期間別)



◎図3-2-1、表3-2-1共通

※2016年の数値は、ベネッセ教育総合研究所で2016年に実施した「第6回学習指導基本調査」のもので、無回答不明を母数から除外して算出した(3,648人)。また1学期の宿題に絞っていない聞き方をしているため、参考値とした。
※宿題の平均時間については、「15分くらい」を15分、「1時間くらい」を60分、「それ以上」を75分のように、置き換えて算出した。
※「宿題はほとんど出さなかった」と回答した人を除いて分析。

◎図3-2-1、2共通

※休校期間別の数値については、4月以降休校したと回答した人のみ
※休校期間は4月以降の休校開始日と終了日から休校日数を算出し、
※4月以降の休校期間の開始日と終了日の記入に論理エラーがある学校の全体値に含まれているが、休校期間別の数値には含まれていない
※「宿題はほとんど出さなかった」と回答した人を除いて分析。

※「よく出した」+「たまに出した」の%。

4 学校再開後、1学期のICT機器の活用実態と今後

①小学校での活用実態と今後

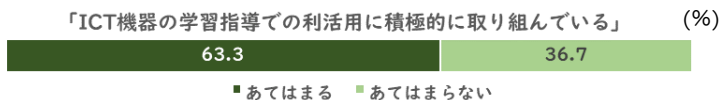


授業でICT機器を活用する場面は、 高学年から多くなる。

1学期(学校再開後)のICT機器の活用について尋ねた。6割の小学校教員は勤務校が、ICT機器の利活用に積極的だと回答した。活用の実態を低・高学年別にみると、インターネットを活用して調べるなど児童の活用は低学年より高学年が多い。また既存のコンテンツやWeb上の素材、解説用スライドの活用など教員の活用も高学年のほうがやや多い。1人に1台導入された場合の活用期待をみると、情報収集や意見発表、計算や漢字の反復練習が上位にあがる。

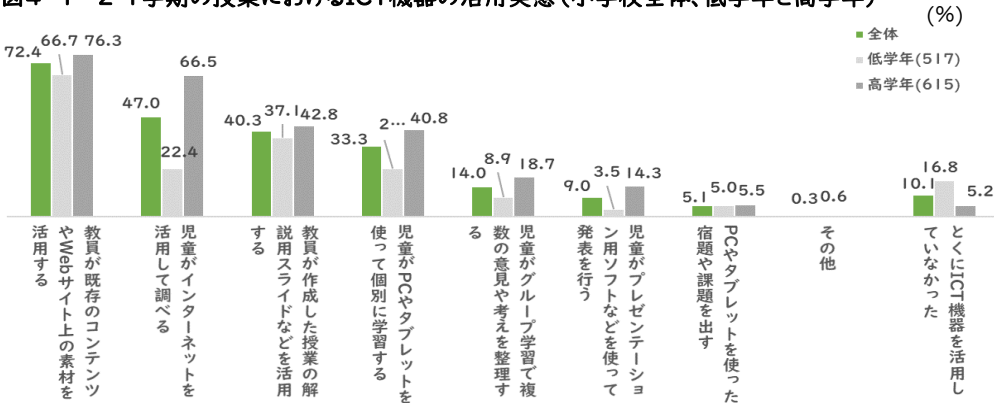
Q. 貴校の特徴: 貴校はICT機器の学習指導での利活用に積極的に取り組んでいますか。

■ 図4-1-1 学校のICT機器の学習指導での利活用について(小学校全体)



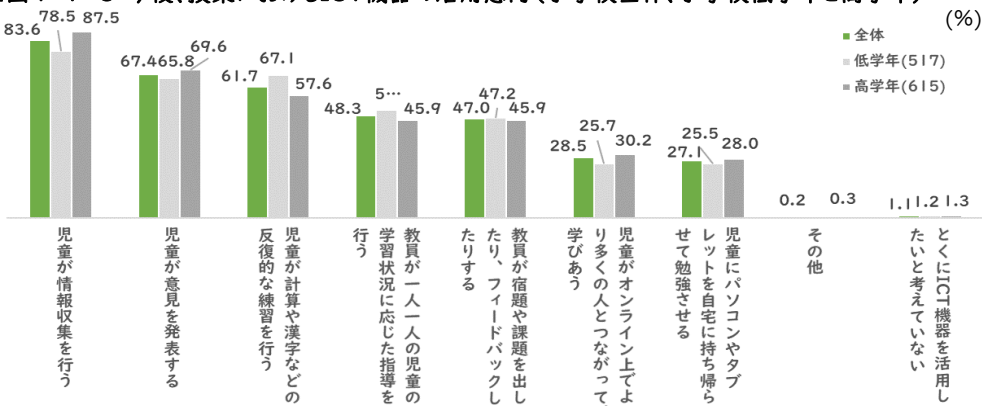
Q. あなたは、1学期(休校した学校は休校期間を除く)の授業において、次のようなことは行っていましたか。行っていたものをすべて選んでください。

■ 図4-1-2 1学期の授業におけるICT機器の活用実態(小学校全体、低学年と高学年)



Q. これから学校で児童1人に1台パソコンやタブレットを導入することとなった場合についておうかがいします。あなたは、ICT機器を活用して、どのような学習指導を行いたいと思いますか。あてはまるものをすべて選んでください。

■ 図4-1-3 今後、授業におけるICT機器の活用意向(小学校全体、小学校低学年と高学年)



◎ 図4-1-2,3共通
※「低学年」は小1生～小3生の回答、「高学年」は小4生～小6生の回答。
※複数回答。
※全体の降順に表示。

4 学校再開後、1学期のICT機器の活用実態と今後

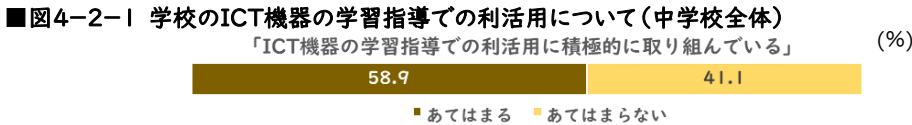
②中学校での活用実態と今後



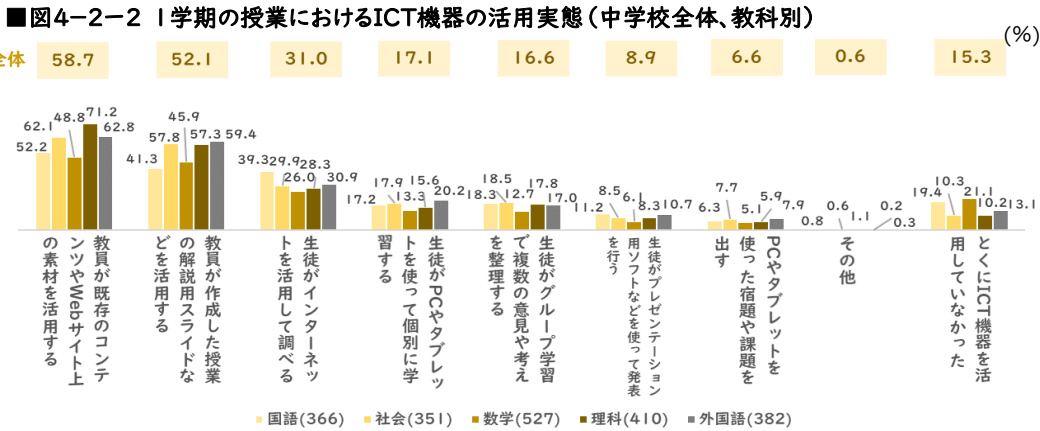
教科の特性に合わせて、ICT機器が活用されている。

1学期(学校再開後)のICT機器の活用について尋ねた。約6割の中学校教員は勤務校が、ICT機器の利活用に積極的だと回答した。活用の実態を教科別にみると、既存のコンテンツやWeb上の素材の活用は理科、解説用のスライドは外国語、社会、理科、生徒がインターネットで調べるのは国語で多く、各教科の特性に合わせて活用していることがわかる。1人に1台導入された場合の活用期待をみると、情報収集や意見発表、宿題の提示やフィードバックが上位にあがる。

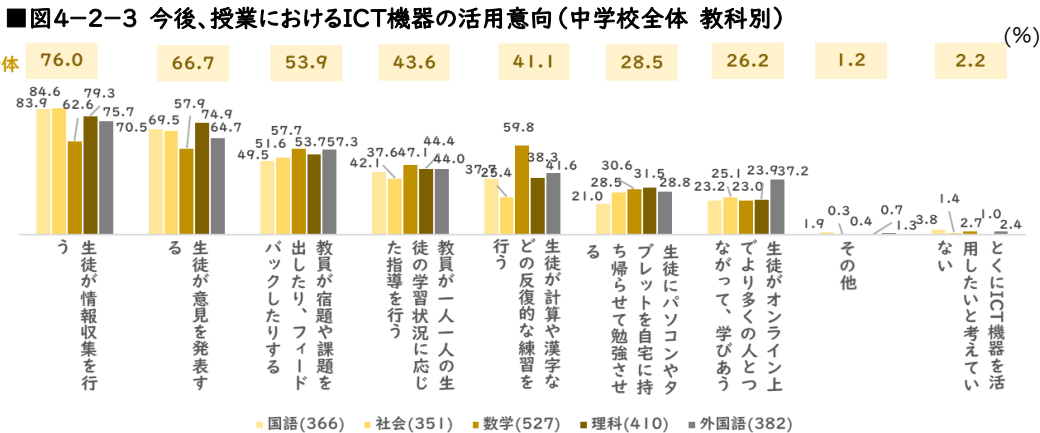
Q.貴校の特徴:貴校はICT機器の学習指導での利活用に積極的に取り組んでいますか。



Q.あなたは、1学期(休校した学校は休校期間を除く)の授業において、次のようなことは行っていましたか。行っていたものをすべて選んでください。



Q.これから学校で生徒1人に1台パソコンやタブレットを導入することとなった場合についておうかがいします。あなたは、ICT機器を活用して、どのような学習指導を行いたいと思いますか。あてはまるものをすべて選んでください。



◎ 図4-2-2, 3共通
※複数回答。
※全体の降順に表示。

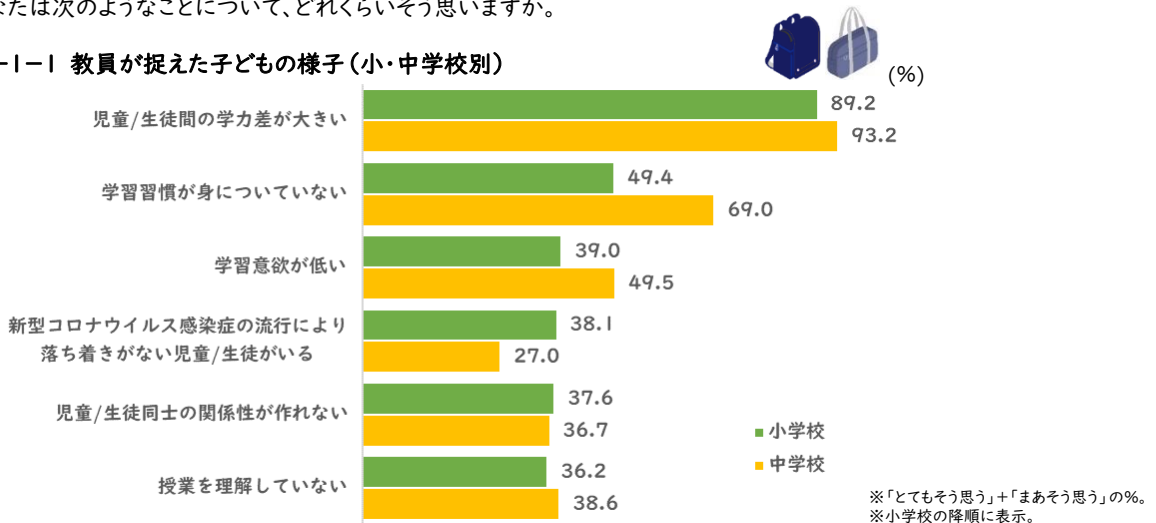
①教員が捉えた子どもの様子

小・中学校とも新入生は、
友だちとの関係性が作れない傾向が強い。

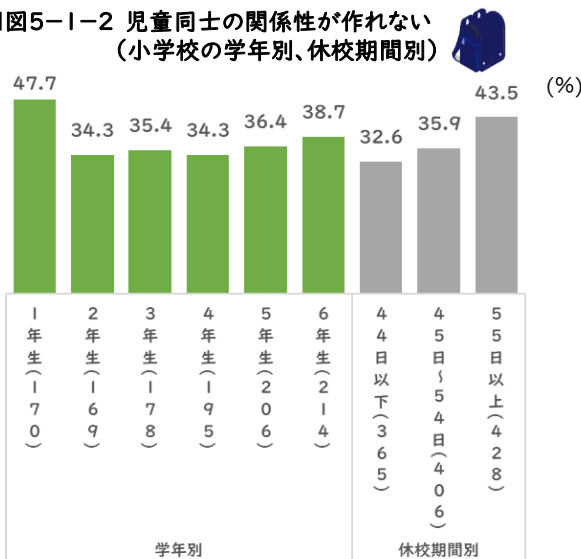
教員から見た子どもの様子を尋ねた。小・中学校ともに9割前後の教員が、児童/生徒間の学力差が大きいと感じている。学習習慣が身についていない、学習意欲が低い様子は、小学校より中学校でより多く見られる。また小・中学校とも、とくに新入生(1年生)で児童/生徒同士の関係性が作れない様子が多く見られる。さらに小学校では、休校期間が長い学校の教員ほど、児童同士の関係性が作れない傾向が強いと感じている。

Q. 今、あなたは次のようなことについて、どれくらいそう思いますか。

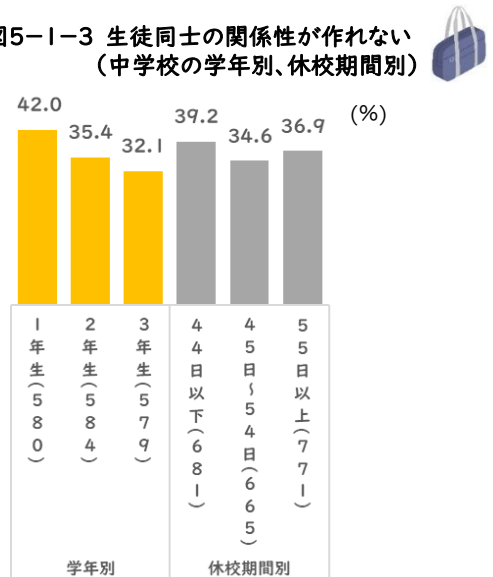
■ 図5-1-1 教員が捉えた子どもの様子(小・中学校別)



■ 図5-1-2 児童同士の関係性が作れない
(小学校の学年別、休校期間別)



■ 図5-1-3 生徒同士の関係性が作れない
(中学校の学年別、休校期間別)



◎ 図5-1-2、3共通

※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

※休校期間別の数値については、4月以降休校したと回答した人のみを分析。

※休校期間は4月以降の休校開始日と終了日から休校日数を算出し、3分割にした。

5 教員のさまざまな意識

②教員の学力や指導に関する考え方

知識・思考力・主体性の育み方の考えは、担当する学年によって差がある。

【A】【B】で示した学力観のいずれに考えが近いかを尋ねた。【A】知識を定着させてから、思考力や主体性を育むのが良い、【B】知識、思考力、主体性は相互に関連させ合いながら育むのが良いでは、小・中学校ともに【B】の考えが多いものの、中3生の担当教員では【A】【B】の考えが拮抗する。【A】知識を増やすことや正しく覚えること、【B】知識を他の学習や生活で活かせるようにすることは、小・中学校ともに【B】の考えが多い。

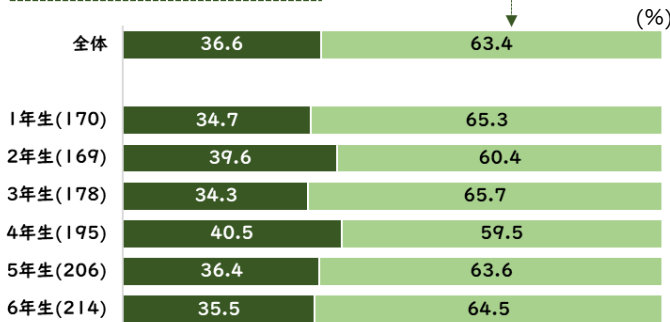
Q.あなたはAとBどちらの考えに近いですか。より近いほうを選んでください。

■図5-2-1 教員の学力観(小学校全体、学年別)



【A】知識を定着させてから、思考力や主体性を育むのが良い

【B】知識、思考力、主体性は相互に関連させ合いながら育むのが良い

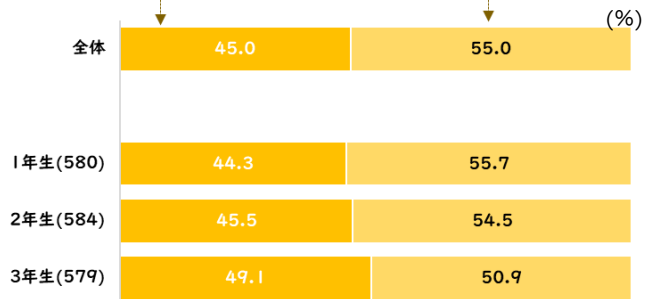


■図5-2-2 教員の学力観(中学校全体、学年別)



【A】知識を定着させてから、思考力や主体性を育むのが良い

【B】知識、思考力、主体性は相互に関連させ合いながら育むのが良い



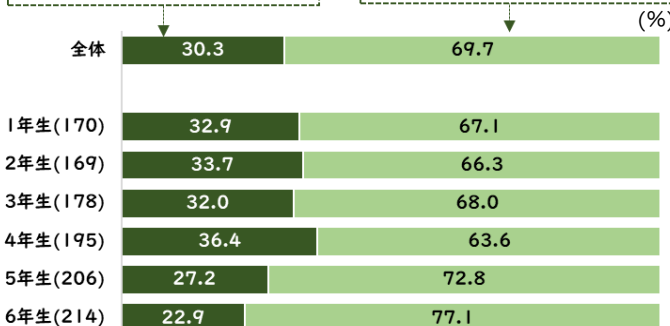
Q.あなたの指導は、どちらかというAとBのどちらに重点を置いていますか。より近いほうを選んでください。

■図5-2-3 教員の指導観(小学校全体、学年別)



【A】知識を増やすことや正しく覚えること

【B】知識を他の学習や生活で活かせるようにすること

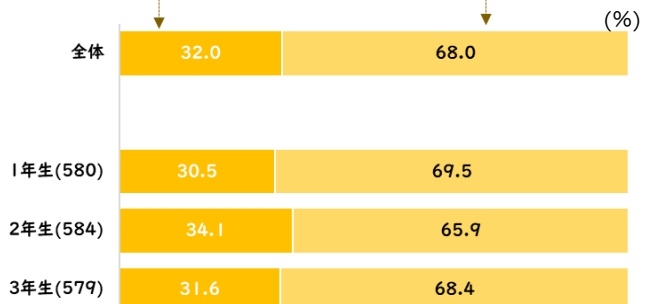


■図5-2-4 教員の指導観(中学校全体、学年別)



【A】知識を増やすことや正しく覚えること

【B】知識を他の学習や生活で活かせるようにすること



5 教員のさまざまな意識

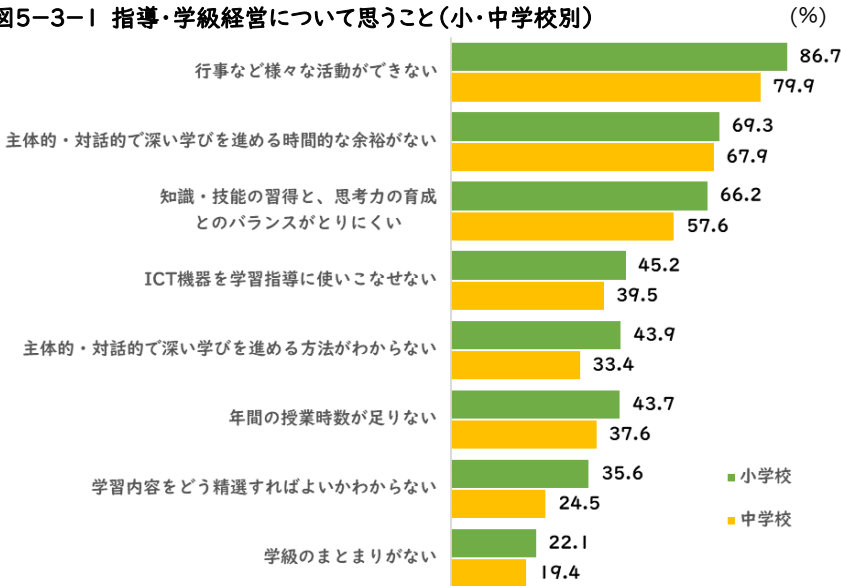
③指導・学級経営について思うこと

指導・学級経営で8割の教員は、
行事など様々な活動ができないと感じている。

指導・学級経営について思うことを尋ねた。小・中学校ともに行事など様々な活動ができないと回答した教員はもっとも多い。次いで、主体的・対話的で深い学びを進める時間的な余裕がない、知識・技能の習得と、思考力の育成とのバランスがとりにくいが多い。新型コロナウイルスによる制約の中での資質・能力の育成に悩む様子が見えがえる。また、小・中学校ともに休校期間が長い学校の教員ほど、年間の授業時数が足りないことに悩んでいる。

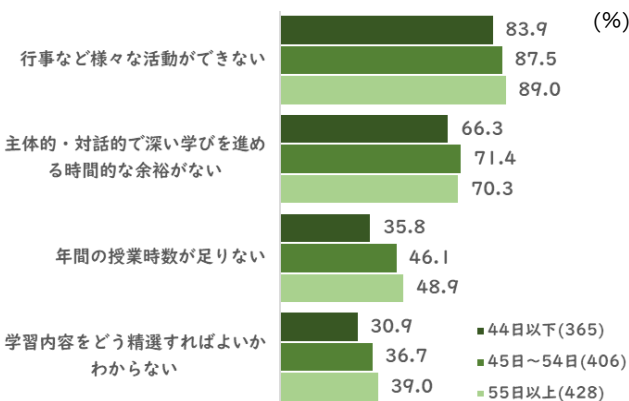
Q. 今、あなたは次のようなことについて、どれくらいそう思いますか。

■ 図5-3-1 指導・学級経営について思うこと(小・中学校別)

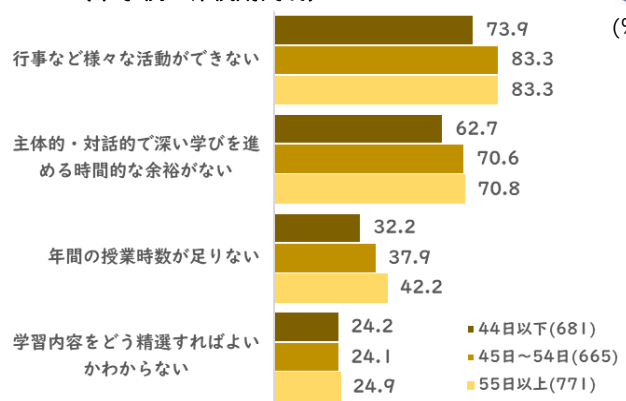


※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。
※小学校の降順に表示。

■ 図5-3-2 指導・学級経営について思うこと(小学校の休校期間別)



■ 図5-3-3 指導・学級経営について思うこと(中学校の休校期間別)



◎ 図5-3-2,3共通

※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

※休校期間は4月以降の休校開始日と終了日から休校日数を算出し、3分割にした。

※休校期間別の数値については、4月以降休校したと回答した人のみを分析。

※休校期間別は、小学校の数値で最高値と最小値との間に5ポイント以上差がある項目のみ図示。

5 教員のさまざまな意識

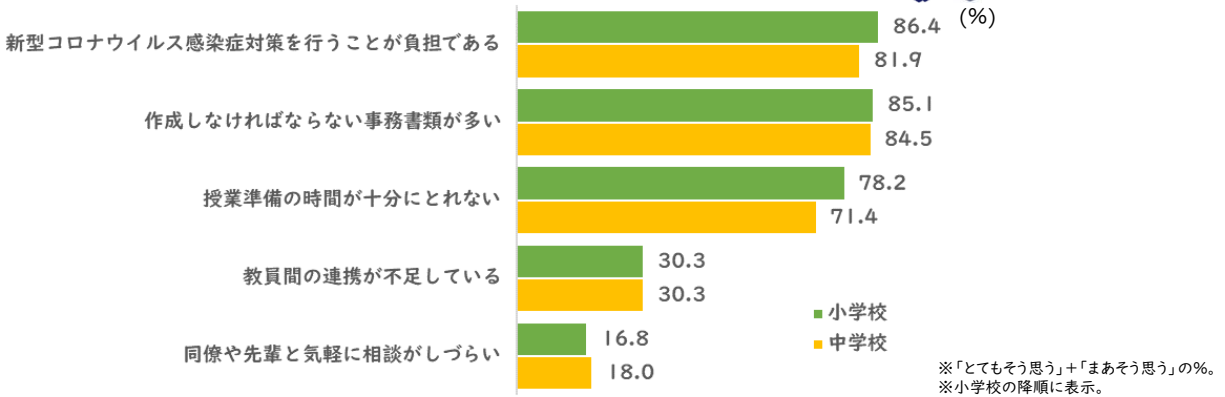
④仕事の量や教員間の連携について思うこと

8割の教員は新型コロナウイルスへの対策が負担であると感じている。

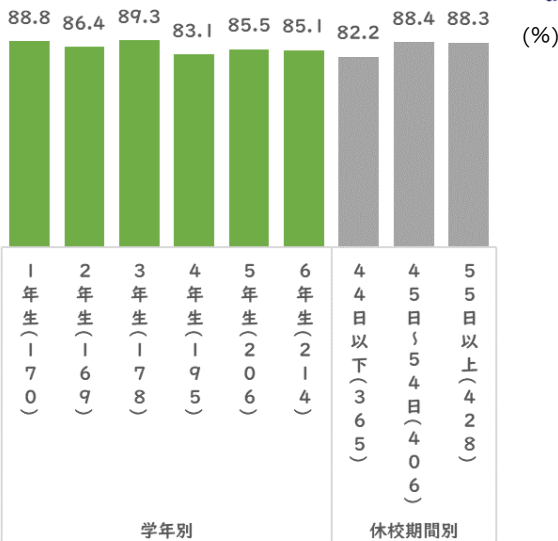
仕事の量や教員間の連携について尋ねた。小・中学校ともに、行事など新型コロナウイルス感染症対策を行うことが負担である、作成しなければならない事務書類が多い、授業準備の時間が十分にとれないに「とても+まあそう思う」と回答した教員は、7~8割である。大半の教員が新型コロナウイルスへの対策に時間を取られ、授業準備を十分に行えないことに悩んでいる様子が見えてくる。

Q. 今、あなたは次のようなことについて、どれくらいそう思いますか。

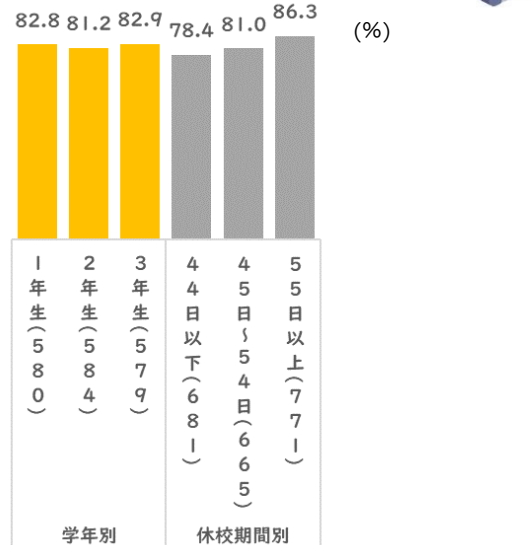
■ 図5-4-1 仕事の量や教員間の連携について思うこと(小・中学校別)



■ 図5-4-2 新型コロナウイルス感染症対策を行うことが負担である(小学校の学年別、休校期間別)



■ 図5-4-3 新型コロナウイルス感染症対策を行うことが負担である(中学校の学年別、休校期間別)



◎ 図5-4-2、3共通

※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

※休校期間別の数値については、4月以降休校したと回答した人のみを分析。 ※休校期間は4月以降の休校開始日と終了日から休校日数を算出し、3分割にした。

5 教員のさまざまな意識

⑤教員の多忙感や疲れ

小・中学校とも約7割の教員が、 例年より忙しく精神的に疲れている。

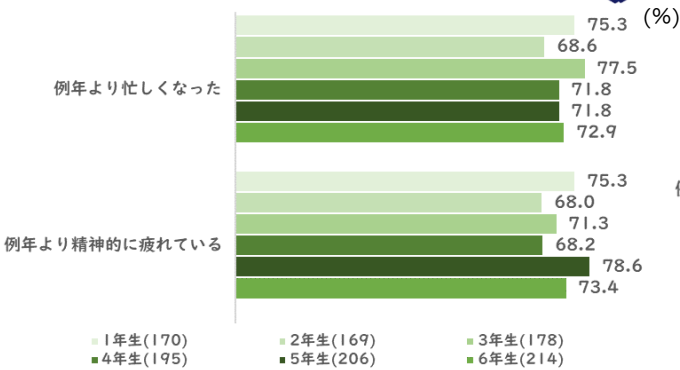
教員の多忙感と疲労感について尋ねた。小・中学校ともに、例年より忙しくなった、精神的に疲れていると回答した教員は7割前後である。学年別にみると、小学校では小1生と小3生の担当教員の多忙感、また小1生と小5生の担当教員の疲労感が強い傾向である。中学校では高校受験を控えた中3生の担当教員は多忙感と精神的な疲労が強い様子がうかがえる。また中学校で休校期間が長い学校の教員ほど、例年より多忙で疲労している様子がわかる。

Q. 今、あなたは次のようなことについて、どれくらいそう思いますか。

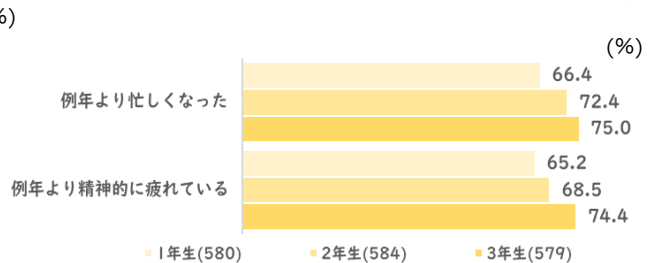
■ 図5-5-1 教員の多忙感や疲れ(小・中学校別)



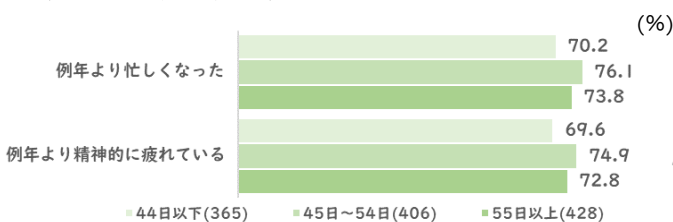
■ 図5-5-2 教員の多忙感や疲れ(小学校の学年別)



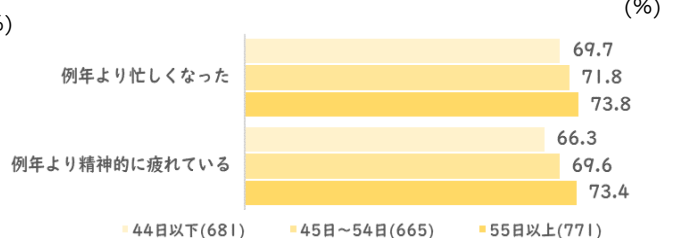
■ 図5-5-3 教員の多忙感や疲れ(中学校の学年別)



■ 図5-5-4 教員の多忙感や疲れ(小学校の休校期間別)



■ 図5-5-5 教員の多忙感や疲れ(中学校の休校期間別)



◎ 図5-5-1~5共通

※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

※休校期間別の数値については、4月以降休校したと回答した人のみを分析。

※休校期間は4月以降の休校開始日と終了日から休校日数を算出し、3分割にした。

5 教員のさまざまな意識

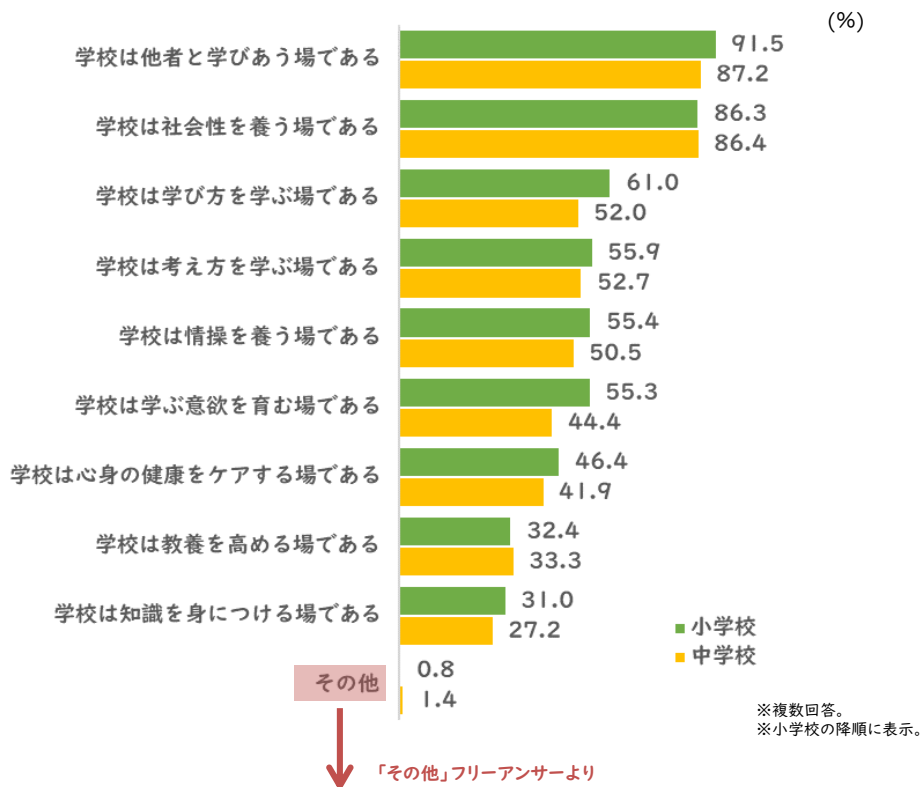
⑥ 学校教育への意識変化

小・中学校とも約9割の教員が、
学校は他者と学び合いの場だとより強く感じた。

新型コロナウイルス感染拡大後に、より強く感じるようになった学校に関する考えについて尋ねた。小・中学校ともに約9割の教員が、学校は他者と学び合う場である、社会性を養う場であると強く感じるようになったと回答している。新型コロナウイルスによって学校が休校し、人との関わりが制約されたことで、他者と学び合い、社会性を育むことができる学校という場の尊さをより強く感じたようだ。

Q.新型コロナウイルス感染症の拡大と、それに伴う休校措置などを契機に、学校に関するあなたの考えは変わりましたか。次のことについて、以前よりいっそう強く感じるようになったものをすべて選んでください。

■ 図5-6-1 新型コロナウイルス感染拡大後の学校に対する考え方の変化(小・中学校別)



家庭の事情のある児童の安全確保セーフティネットでもある。



学校は自立の仕方を学び、促す場である。

調査監修・協力・企画・分析メンバー

【調査監修】

耳塚 寛明 青山学院大学
コミュニティ人間科学部・学部特任教授

【協力】

木村 治生 ベネッセ教育総合研究所主席研究員

【企画・分析】

高岡 純子 同研究所主席研究員
持田 聖子 同研究所主任研究員
岡部 悟志 同研究所主任研究員
邵 勤風 同研究所主任研究員

ベネッセ教育総合研究所 WEB サイトのご案内

本ダイジェスト版およびベネッセ教育総合研究所で実施している各種調査結果は、以下のサイトでご覧いただけます。

<https://berd.benesse.jp/>

「小中学校の学習指導に関する調査2020」ダイジェスト版

発行日 2021年3月12日

発行人 谷山 和成

編集人 高岡 純子

発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

編集協力 松本 留奈